

佑啓

ゆ う け い

発 行 者

社会福祉法人 佑啓会

理事長 里見 吉英

〒290-0265

千葉県市原市今富 1110-1

TEL 0436-36-7611

FAX 0436-36-7612

編集者 広報委員会

心はどこに

行場 貴子

新しい年を迎え、早や一ヶ月が経ちました。「二年の計は元旦にあり」皆様抱負や目標を立てられ、気持ち新たにまい進していることと思います。

進してまいりたいと思います。今後ともご指導、ご支援を賜りたくよろしくお願い申し上げます。



昨年、ふる里学舎は、おかげ様で平成五年の開所から二十一年目を迎え、秋に佑啓会創立二十周年記念式典を開催致しました。会場となりました鴨川グランドホテルは、毎年利用者・家族一泊旅行などで利用させて頂いている馴染みの場所です。参加者は家族と職員、丁度半々の二十余名。こういった式典にはつきものの決まりきった堅苦しいご挨拶などはなく、いたってシンプルで終始和やかな雰囲気のある里学舎らしい式になりました。ユーモアにあふれた来賓理事のご挨拶に始まり、二十年を振り返る職員作成DVD映像、理事長の講演は、参加者それぞれが、その時その時の思いに浸ることが出来た感慨無量のひとときでした。

創立三十年五十一年の先輩施設からみれば二十年はまだまだヒヨッコ。やっと大人の仲間入りをしたふる里学舎。はたちをひとつの節目ととらえ、職員一人ひとりが何をすべきかを考えながら更なる飛躍に向けて精

ます。その変化に乗り遅れないように、大半の人達が多かれ少なかれストレスを抱え、常に何か(誰か)と比べたり、競争し、先を争っていないと気が済まず、気晴らしの為のレジャーなどでさえ商品化されたお仕着せのものを唯唯諾諾と受け入れている。便利で豊かになった社会は、実は自らを過剰に管理する窮屈で柔軟性に欠けた面白味のない社会生活になりつつあるのかもしれない。二十四時間営業している便利なコンビニでは、刻まれた袋入り野菜が並び、料理はレンジでチン。鍋や包丁は台所のオブジェと化している——果たして豊かな生活なのでしょうか。



います。感性を養う為には、機械ではなく、相手の肉声や表情などに触れることが大切だと思います。

ふる里学舎の組織のひとつに運営推進会議があります。各事業所のチーフ、幹部職員で構成され、毎月一回会議を開いております。各事業所の状況や課題を検討したり、理事長から障害者福祉の最新情報や施策などを伺い勉強する機会となっています。具体的な会議状況は、毎回宿題が出され、各事業所での検討や報告を基に再度参加職員で話し合うといった具合です。一番直近の課題で、なかなかまとまらず、回を重ねているものに、スマートフォンなど「情報伝達機器の利用についてのルール作り」があります。普段は理事長から提言があり、皆で検討を重ねていくという形式ですが、この件では、若いチーフ職員から先ず最新の機器の説明を受け、理事長はじめ幹部職員は、「ライン」だの「フェイスブック」などと聞き慣れない用語にうろたえながら質問をするといういつもとは逆パターンで進めています。一斉送信で、日本はおろか世界中の人と情報共有出来る仕組みを当然のように説く若い職員に世代の隔りを痛感させられ、老いも若きも納得できる「ルール作り」には、もう少し時間がかかりそうです。



今回の話し合いでは、情報伝達機器のめざましい進歩を改めて痛感しました。と同時にこうした技術の進歩が果たして人と人との関係において役立っているのだろうか疑問にも思えます。機器の発展によって人と人とのつながりが希薄になっていくのではないかと心配にさえなっています。

人と人との間に存在する「心」を健やかに育んでいく為には、花を愛でたり、身体を動かし汗を流したり、書物で教養を深めたりと己の感性を磨く努力は必要ですが、やはり、人とのつながりを大切にすることではないでしょうか。東日本大震災という未曾有の大災害では、人知の及ばない自然の恐さをまざまざと見せつけられました。が、それでも我々人間は、「絆」の大切さや有難さを改めて確信し、前へ向かって生きています。喜びや痛みを分かち合う、助けたり助けられたり、お互い様の精神など古来から綿々と培われてきた人としての営みを再認識することや、一人ひとりの想像力や配慮、経験が現代人の抱えている様々な問題解決の糸口になるのではないかと思います。



締める」と言った言葉に示されているように、馬と人間の関係は、古くから深かった様です。「道草」の楽しみ—それは単調な毎日のささやかな刺激やゆとりにつながります。ただ、度が過ぎて本筋からはずれ、老母に心配をかけないよう、時折気持ちの「手綱を引き締め」なければいけないと自戒しております。

うまくいってもいなくても人生いろいろ、人間万事塞翁が馬、笑顔でまいりましょう。

(小石川福祉作業所施設長)

佑啓会ロゴマーク完成!

ふる里(ふ)と学舎(が)で構成し、黄色や緑で豊かな里山をイメージし、オレンジ色の差し色はミカンをイメージしています。また、字体のライン(青)は里山の道を表現しています。

今後、様々な形で佑啓会の顔として皆様のお目に触れるかと思ひます。

白黒の紙面ではわかりづらいと思いますので、送られてきた封筒を是非、ご覧ください。



最後の引越し

高緑 あや子

社会福祉法人佑啓会二十周年を記念する良い年に、指定管理者制度により市川市松香園の運営を引き受けてくださりありがとうございました。平成二十四年の秋、市から「ふる里学舎さんに決まりました。」と説明を受けた時は、ビックリしましたが、心の中では「やった。」と私は喜びました。他の保護者の顔を見渡すと安堵な表情が多く見られました。色々な事に手広く活動し、運営母体がかかりしている事等々、保護者の間でも、ふる里学舎さんに決まると良いわねとの声がチラホラ出ていました。引継ぎから一年、大きな混乱は見られなかったと思われまます。個々の問題は有ったでしょう。お互いに慣れるまでは大変でしょう。職員の「若さ」は、すばらしいですね。いつも園がきれい。園バスが故障した時の対応の早さには感心致しました。



園庭から見える夕日に映えている東京スカイツリー。この高台の絶景の地に根付いて頂き、色々な福祉の支援を末永くお願い致します。

さて今度は、四十才自閉症の陽子との暮らしを。平成二十二年十二月二十四日、主人をガンで亡くしました。八か月の闘病生活の末六十七才でした。この頃から陽子は、右目の微かな

光も失いかけていましたので、これから一人で見るのは大変。ショートステイの練習をと思いました。その時、ふる里学舎の松橋さんの名刺が有ることに気付き、すぐに電話をしました。十三、四年前に、親子三人でふる里学舎さんの調理クラブを月二回、数年通っていた。陽子の目の手術を機に止めて十年は経っていました。平成二十三年二月二十八日面接した時、松橋さんが「自閉で見えない事は、大変ですね。お母さん、三本の柱でこれから行きましよう。一、松香園に通う。二、地域でのデイサービス。三、ショートステイ。元気で暮らせまよう。」と、ショートステイを即答してくださいました。三月からスタート。私は、ゲストハウスで一泊し、陽子の様子を見守りました。なかなか寝付けず、窓から下の高速を走る車のライト、女子棟の明かりを見ると、主人と市原まで高速を走った思い出が浮かび、涙が止まりませんでした。でも「やるしかない」と決めました。ショートステイは順調に終わりました。



そしてあの大地震。都内で一人暮らしをしている陽子の妹が、「お母さんとお姉ちゃんが心配」と都心の会社から六時間掛けて歩いて、夜中家に戻って来てくれました。園まで毎日二十分送迎していましたが、その時の大変さも有り、老後車の運転が出来なくなったり、下の娘に迷惑を掛けないためにも、園の傍に引っ越しを考えた。一週忌も終わっていませんし、築十八年の家も住めるので反対されましたが、老いていくこれからの長い生活を考え、園まで歩いて、買い物も便利、園の仲間も近くにいる、国分二丁目に限定し土地探

しを始めました。十三カ所目に、間口と奥行が住んでいた土地と似たものに出会いました。地主さんが園の傍の方で、親子二人で暮らすためなら「売りましよう」と言っけて頂けて買うことに。この時期、お墓探しと陽子の後見人申請と重なり六十才過ぎた頭の中は、書類の文字、お金の計算と、計画がどんどん進んでいくと怖くもなり、眠れない日も有りました。前の家と同じハウスメーカーにほぼ同じ設計で注文し、失明した陽子が十八年住み慣れた家と同じ動線になる様に工夫しました。平成二十四年八月、新しい家は完成。いよいよ引っ越し。陽子関係のものは削れなかったで、大手引っ越し屋さんには止め、段ボールを近所の店から貰い全部自分で荷造りし、便利屋に頼んでとても格安に出来ました。陽子は、ショートステイでふる里学舎さんに六日間お願いし、きれいに片付いてから新しい家でも直ぐ「お家に帰る。」としばらくの間、毎日何回も言い続けていました。

全盲になって、生活リズムが日中と逆転し、夜中起きる事が多くなっていました。引っ越しをして三日目。私がついに夜中ウトウトしていると大きな「ガチャン」の音で目が覚め、真白い煙が。爆発？火事？「もう終わり」だと思いましたが。しかし、火事ではなく陽子が歩き回りながら仏壇を倒した音と、灰の飛び散りでした。引っ越しして一年五ヶ月経ち、大分慣れて来ました。今は、時々歩いて通園しています。近所には特別支援学校、福祉作業所、老人のグループホームも有り、この国分の町で二人生きて行く自信が持てました。



親心は複雑にして明快

堀金 兼太郎

「文は人なり」とはよく言われたもので、上段の文章を読み終えた時には、陽子さん、そしてお母様のご家庭での状況が目につかびました。と、同時に普段の会話などからは窺い知れない様々な苦勞等を感じることでもでき、それを普段出さないお母様のお人柄に触れた思いです。

陽子さんと私たちの出会いは、文中にもあるように、ふる里学舎における相談支援事業が最初でありました。私たちはふる里学舎ショートステイの陽子さんを先に知り、それから御縁があり松香園の運営を開始し、日常の陽子さんと出会うことになりました。

私はここ数年東京そして市川と都市部の通所施設での業務が続いています。それ以前は本部の市原で農作業などをしていましたので、異動当初は環境や文化の違いに戸惑いや驚きを感じました。そしてまたまた私が勤めた施設は双方ともに昭和四十年代創立という歴史もあり、福祉の歴史や考え方、ご家族の思いなども似ているなあと感じたりもしました。入所施設や短期入所事業等の数

は都市部ではやはり絶対数は少ない状況です。その為、長期利用が難しい、予約がいっぱいですぐには利用出来ないことから、選択肢は地方の施設へと視野を広げることとなります。しかし、それはそれで、年老いてくると送迎が困難、遠くにいるという不安、農作業などやせたことがないから可哀想、など様々な理由からサービス利用をためらう方、ハナから利用するつもりはないという方も少なくありません。また、うちの子は皆さんに迷惑をかけるから利用出来ない、身の回りのことは私がやってあげないと何も出来ないから利用しないといったご意見もあります。

高緑さんのようにご家庭の状況という方は沢山いらっしゃると思います。「元氣な間は自分で」いつの間にか、それが頑張りすぎる傾向にあるようです。精神薄弱から知的障害、収容施設から支援施設、措置から契約、地域福祉、障害者就労の拡充、めまぐるしく変化する福祉激動の時代を生きてきた保護者の方と、すでに福祉は「サービス」と呼ばれ、選択したり様々な事業を組み合せて利用するということが当たり前にできる今の方々とでは違いもあるかと思っています。



とはいえ、いつの世も親心というのには普遍であり、頑張りすぎてしまいう方はまだまだいらっしゃると思います。ただ、以前と違うのは相談できる存在が地域に少しずつ増えてきたこと、まだまだ足りないと云われますが、サービス提供事業所が増えていること、上手に活用することは良いことだと思います。と、長々と書きましたが、実は短期入所などに踏み切れない方々

の多くはお子さんと離れるのが寂しいという気持ち強いように感じることがあります。

以前東京で担当したとある保護者の方は、ご本人の初めての短期入所の際には、朝の夕の電話をくれては、「元氣でやりますか？」とお迎えに来て、「居ても立ってもいられませんか」と言っでご本人とは涙の再会と相成る一泊二日でありました。ところが今ではその方もすっかり常連になられ、それぞれの時間を満喫しています。もっとも、ご本人は初めから楽しんでいたので

が。佑啓会は昨年二十周年を過ぎましたが、松香園は今年で四十年を迎えることとなります。そこそ親身ほどの年の差でもあり、実際職員もまだまだ若い者もたくさん居ります(園長は別ですが)。よい関係を築いていけたらと思います。

(ふる里学舎松香園 支援係長)

編集後記



朝、布団から出るのに時間がかかるこの季節。アメリカでは大寒波が訪れ、ナイアガラが凍ったとか。通勤時、行き交う人たちは寒さのせい、みんな下を向き早足で歩いています。この時期、松香園の園庭にはひっそりとサクラの花が咲いていました。寒くても上を向けばホッと心温まる景色がすぐそこにあります。佑啓八十七号をお届けします。河田理紗子